

養蜂めぐり歩き <その2>

エチオピアにおける伝統養蜂と課題

エチオピアの南西部はアラビカコーヒー発祥の地として知られ、今でも野生の木からの採集が行われている。そのコーヒーの森がもたらす生物多様性を活かして、伝統的にハチミツの採集も営まれてきた。この地域を車で走っていると、道路沿いの大木にも巣筒が架けられているのを目にすることができる。伝統的巣筒は、かつては幹の中身をくり貫いて作成した頑丈なものもあったが、今では竹を筒状に編み上げたものや、現地語名でバヤ（モクセイ科）と称される木の樹皮を筒状にし、両端や周りを竹（ハイランドバンブー）の皮で覆ったものが多く用いられている。竹が生えている高地においては、この養蜂の巣筒の作成・販売が現金収入源の1つになっており、市が立つ日には男たちが何十もの筒を抱えている姿を見かける。



大木に架けられた伝統養蜂の巣筒

巣筒は木に架ける前に煙で中身を燻蒸することで、ハチを誘引しやすいと言われている。森林コーヒーの伝統的利用権を有している養蜂家の場合、その広さ（大木の数）にも寄るが、多い人は一度に100本を超える巣筒を架ける。ただ、ヒヒやサルに荒らされることを防ぐため、ロープを使って枝下に吊るす必要があり、数が多いと高木での難しい作業が求められる。蜜源として好まれるのがウコギ科のブトーと称される木で、香り高い白いハチミツが採集でき、エチオピア国内で人気が高い上、日本でも販売されている。

ハチミツを採集する作業は、以前はあまり使わなかったようだが、最近はハチを落ち着かせるために煙を用いている。しかし、誤って火災となることもある。また、この採集作業は夜間に行われることが多く、樹上からの転落による事故も増えてきている。伝統養蜂を営んできた世代が高齢化

し、未熟な若手が収入を求めて無理な数を設置し、博打にも近いような状況になりつつある。調査によると、沢山の巣筒を架けても、実際にミツバチが入るのは1-2割に過ぎず、しかも1つの筒から採集できる量は5-10kg程度である。近代養蜂箱を使用している養蜂家は、この10倍以上を1つの箱から生産することができている。

かつてのように熟練した養蜂家が知識や経験を活かし、身近で入手できる材料を用いて、適度な量での養蜂を行っていた方法であれば、非木材林産物を活かした理想的な生計手段を言えたであろう。しかし、今や同地域ではコーヒーに次ぐ主産業となり、巣筒までが換金商品となり、天然林の荒廃につながっている。また、採集における森林火災やミツバチのコロニー破壊も生じ、自身も転落の危険が伴う。こうした中、伝統的な養蜂から近代養蜂への転換を試みて、実際に養蜂箱を購入したものの使用方法がわからない…という要望も出てきている。

現在実施しているJICAプロジェクト活動の中で、移行型巣箱を用いた養蜂技術を研修し、取り組みを始めている。この移行型巣箱はケニア型とも称され、身近で取れる木の枝や泥を組み合わせて作成し、うまく管理すれば近代養蜂並の収穫量を見込める。ただ、これまでのように木に架けて待つだけでなく、ハチの生態や女王バチの様子を観察しながら、適切な処置を行う必要がある。今後、定期的な技術研修やモニタリングを行うことで、移行型巣箱による生産量と収入向上がもたらされ、森林保全との両立につながるよう支援していきたい。



移行型巣箱にミツバチの群れを移す作業をする研修参加者